Herman Melvilleの宗教的影響について (2)

岡　本　雅　夫

岡山理科大学教養部

(昭和63年9月30日　受理)

はじめに

本論は，本紀要第22号(B)に掲載されたものに連続するもので，Melvilleの作品，特にMoby-Dickに焦点を合わせて，Melvilleの作品に見られる宗教的影響を考察するものである。前回と同様に，Thomas. W. Herbertの著作'Calvinism and Moby-Dick'を読み，その内容を要約し，Melville's Log, Leon HowardのBiographyなどを参照しながら考察を進める。

前回では，Melvilleが，父親Allanが事業の失敗の果てに悲劇的な死を遂げるという事態に直面して，強い情緒的衝撃を受け，父親の信仰に対して疑惑を抱き始め[1]，やがて，伝統的宗教環境の中で精神的苦悩と宗教的葛藤を深めて行く入り口の段階までを記述した。

今回は，父親の死後，次第に成長して行くMelvilleが，様々な状況や経験を通して，内面に形成されて行く宗教観を作家としてどの様に表現して行くかを辿って，Moby-Dickを発表しようとする時に，何を胸中に宿していたかを，前回に続いてHerbertの'Calvinism and Moby-Dick'を要約しながら記述する。

I

父親の死後，Melvilleが12歳の少年ながらも，宗教的な意味での強い影響を受けた事件として，Herbertは，母親のMariaが信仰告白をしてthe First Dutch Reformed Churchの一員になったことを挙げている[2]。そして，Mariaが夫Allanの悲惨な死の意味をどの様に解釈しようとしたのかについて，Herbertは次の様に述べている。『Calvinismの信仰を持つ者は，絶対的な力を持つ神と人間の関係についてのいくつかの解釈の中で生きることによって，深い慰めを得たのである。神の測り知れないProvidenceに関してのCalvinismの教義は，神の行いの正しさ（Justice of God's dealings）は，BibleのJobがそうである様に，現代の信者には，はっきり判らないかも知れない。この世での悲惨は，神の世界へ入ることを拒否されたことを意味するのではない。この世で成功することが，徳を意味していないのと同様である。.... Mariaが信仰告白をしたことは，神の救いの行いを自分自身が経験したのだと公言したことを意味している。即ち，Mariaとしては，自分の経験した悲惨（夫の死）は，自分が堕落した状態の現実に自分を目覚めさせてくれるものであり，

それによって自分を救いへの段階へ導いて行く神の恵み深い意図の一部であると見做すようになった。』[3)]

Herbert は，Calvinism の信仰者の態度について，次の様に述べ，Maria が，夫の死によって受けた衝撃から立ち直ろうとする姿勢を示している。

『キリストを信仰する者にとって，人生の真の意味は神の恩寵の中に隠されている。このことを信ずる者は，どの様な逆境が訪れようとも，不幸な現実が不幸ではないかの様に装うことをしないで，顔を上げて歩くことができる。このような，はっきりと物を見る強い精神が，Calvinist Orthodox の用語で言う「キリスト信者の忍耐」(Christian Patience) が意味するものである』[4)]

Maria は，長女の Helen が20歳，次女の Augusta が17歳の時に，それぞれ自分と同じ Reformed Dutch Church へ信仰告白の上入会させている。Melville の家族の中で，父親に代って，この母親の Calvinism の影響が強くなったことは想像できる。その一つとして，Melville の弟 Allan に日曜学校へ出席することを勧める手紙が残っている。

Herbert は，Calvinism の信仰が地域社会に与える影響を示すものとして，教会の刊行物を取り上げているが，特に Melville の父親が臨終にあって狂乱の様相を示したことが，家族に与えた影響を知る上で興味深い。

『この教会の発行する Magazine[5)]に掲載されている「死の床の話」(Deathbed stories) は，「神に選ばれた者 (God's chosen) が，この上ない喜び (bliss) の中で死んで行くのに対して，神に罰の宣告を受けた者 (The Damned) が業火におびえて悶え死ぬ場面を描写したものである。神が，地獄行きの宣告から，ある人達を救い，他は見棄てるという Providence が示されることを経験によって知るものとして，よく知られていた話で，J. M. Mathew は，The Bible and Men of Learning[6)]の中で次の様に認めている。'Deathbed stories は，その重大さが誇張されているが，理性的人間も，死に臨んでの証言が持つ力を否定しないだろう。公平な立場から見れば，死に臨むキリスト信者の精神を圧する力の重さと，死に行く不信仰者 (The dying infidel) の心を狂わせ，力を打ちひしぐ恐しい恐怖との間には，非常に大きな違いがあることを認識するに違いない'』[7)]

Maria は，自ら Reformde Dutch Church に受け入れられた信者として，自らを神に選ばれた者という信念にすがり，Christian としての人間の尊厳を保とうとしていた。

しかし，Allan の死に際の狂乱 (ravings) は，Deathbed stories による解釈からすれば，正に神に見放された者 (the reprobate) の慰められることのない恐怖 (unsolaced horrors) を示唆していた。Melville が，この Calvinist Orthodox の Deathbed stories についての理論に注意を向けたことは有り得るとして，Herbert は，Mardi の98章'Tale of Traveller' と，Redburn の48章'A living corpse'を指摘している。そして，Melville が，父の死後，Calvinist Orthodox に対して，次第に関心を持つようになって行ったと思われる過程を次の様に推論している。

『Melvilleは，父親がCalvinist Orthodoxの信者ではなくて，Arminianであったことは理解できる年頃であった。Allanは，Orthodoxが，'その教義を拒否することによって神に対し生得の憎しみを抱く人間であると考える'一人であったということになる。Melvilleは，'神は正しく裁き，罪には罰を与える'（God is a righteous judge and avenger）というReformed Churchの信仰に直面したが，父を（臨終の狂乱が示すように）神が見放した一人だと信じる理由にも直面したのである。Melvilleは，神の恩寵について自由な立場に立つ父親の運命に，Orthodoxの理論を適用して，その結果父親に対して与えられた測り知れない神の苦しめと見えるもの（apparent suffering）に対して，個人的な憎しみを抱くことも有り得たであろう。』[8)]

Herbertは，Melvilleが父の生前，まだ幸福であった頃には，『対立することのなかったArminianismの自由な立場に立つ人間の敬虔さと，Calvinist Orthodoxの敬虔さが，衝突せざるを得なくなった。Melvilleが吸収してきた宗教的伝統は，それ自体が矛循していたのである。そして，Melvilleは，それらの矛盾を，生きている一人の人間の内面的対立にしてしまう条件の下で吸収したのである。Melville家の家庭宗教（house religion）は，分裂してしまったのである』[9)]Herbertは，Melvilleの意識の深層に，対立する伝統的な宗教観が，根本的な神の本質への疑惑を刻みつけたことを主張している。

II

1832年の1月，父親のAllanが，Gansevoortを始めとして8人の子供を残して死んでからは，Melvilleの一家は，急速に窮迫した状況に追い込まれる。16歳の長男Gansevoortが，父親の事業を引き継ぐことになるが，これは父親の残した負債や，仕入れてあった商品をどうするかという厄介な問題を抱えて，母親のMariaが，自分の母親の遺産や，兄のPeterからの借財を合わせて資金を作り，とに角これ迄通りに夫Allanの商売を続けることにしたということであるらしい。Mariaはこの時，Melville家の綴りを，*Melvill*から*Melville*に変更したのである[10)]。Gansevoort *Melville*の商売は，Allan *Melvill*とは一切無関係であり，全てMariaが責任を取るという保証の下で[11)]，家業がうまく運ぶ為であった。しかし一方では，Calvinist Orthodoxの信仰告白をして，夫のAllanがそうであったと疑いのある'reprobate'の一人という予定された運命から，自らを含めて子供達が救われることを願ったことも，改姓の理由であったと推察できるのである。

Allanの死んだ同じ年の9月，Melville一家の象徴的存在であったMajor Melvillが向いの家の火災が原因で風邪を引き死亡する。Allanが，このMajor Melvillの財産を担保にして残していた負債を，Mariaは支払うことができないで，BostonのMelvill家との関係に緊張が生じる。一方頼りにしているAlbanyの名家である実家の弟Peterも結婚して独立しようとする。Mariaは，毛皮商を引続いて営むとは言え，16歳のGansevoortを頭に8人の子供を抱え，逼迫した境遇に追い込まれている。この頃，Mariaは，AlbanyのGansevoort

家と Boston の Melvill 家のいずれをも頼りに出来ないで, Pittsfield の農場を営む亡夫 Allan の兄 Thomas に精神的な慰安を見出していたようである。New York でコレラが流行すると, Gansevoort 以下子供全員を連れて Pittsfield へ避難している。1834年の春, Gansevoort の毛皮と帽子の作業場が火を出して, 2000ドル近い損害を受けたが, 大した打撃とはならなかった様で, 1835年には, Melville も銀行を止めて, 兄の商売を手伝うことになった。兄に従って Albany の Young Men's Association for Mutual Improvement の一員になり, この協会の図書を手にすることができるようになった。又, Albany Classical School へ兄の仕事を手伝うかたわら通い始めている。Melville はこの学校の教員に, 'enthusiastic writer'として記憶されるが, 1837年の秋以前に school teacher の資格を得ている。

1836年の後半におけるアメリカの経済は不景気となり, 一時は, 作業所で働く'trimmer'を20名募集の広告を出した程の Gansevoort の商売にも, 段々と影響が出始める。売上げ金の回収が思うように行かないで, Maria が亡母の遺産を担保に入れて資金の遣り繰りをするが効を奏さず, 1937年の春, 経済恐慌がやってくるとあっさりと破産する[12]。Gansevoort は, YMA の executive member を辞任し, 友人を頼って New York へ出る。

Melville は, この年の秋叔父の Thomas Melvill の農場がある Pittsfield の近くの Sikes District School で教員の口を見付け, 自立の道を歩む努力をするのであるが, 18歳になっている。この頃の Herman Melville の胸中を去来する感概や思い, 特に自分の一家が経験している現実についての意味を, 伝統的宗教観の中で, しかも, 二つに分裂し, 対立する信仰の狭間でどう理解しようとしたのかを, Herbert は次のように述べている。

『この不幸 (Gansevoort の破産) についての, Melville の解釈は, theocentric であり, 商業の領域における変遷の中に存在する道徳的秩序を認識せざるを得なかった。』[13]

Herbert は更に, Melville 家の教会 (Reformed Dutch Church) の牧師, Thomas. E. Vermilye の行った講演の中での, 経済恐慌についての解釈を取り上げて, Melville への影響を示唆しているが, この講演が YMA の集会で行われたことを考えれば, Albany の地域社会の青年には大きな影響を与えたものと思われる。(Gansevoort と Melville は既に会員ではなかったが)。

Vermilye は, 経済恐慌についての神学的解釈を次のように述べている。「一時的な栄達のためにも, 道徳的卓越は大切な要件である。良心的でない人間が, 悪智恵や恥知らずな行い, 悪徳によって成功するかもしれないが, 世の事が最終的に明らかにされていく時, 不正な成功 (ill-deserved successes) は, 長くは続かないと判るものである。」[14]そして, 「悪徳的で, 良心的でない人間が, 一見繁栄して絶頂にあるようでも, その人間の感覚が鋭敏であれば, 自責と苦悩で心を裂かれるであろう。」と言い, そして, 一時的に成功を収めた人間が罪の意識によって挫折し, 悲劇に終った多くの例を挙げた[15]。

Herbert は, この Vermilye の説教は, 『経済恐慌に, 有徳な人間 (virtuous sheep) と不道徳な人間 (unscrupulous goat) に分ける黙示録的権威 (apocalyptic authority) を与

えたものであり，この恐慌に生き残った人間の心を動かしたことは，認められることだ』[16]と述べている。そして，このVermilyeの説教に対して，Melvilleが示したであろう反応を次の様に推測する。『このVermilyeの恐慌についての道徳的説明の構造は，父親のAllanが唱えていた実際的信条によく似通っていたので，よく理解できたであろう。しかし，今貧しい生活が始ったので，この道徳的構造を，不慣れな社会的な立場から眺めることになった。恐慌に生き残った連中が，実際に父や兄と何ら変らない人間であるのに，道徳的満足を増大させ，宗教的承認（religious sanction）を当然の如く主張するのを，彼等と逆の立場に追い込まれた人間として眺めなければならなくなったのである。Melvilleは，父親が破産しないために利用していた正当化の構造（structure of justification）が，同時に不運な人間（the unfortunate）を不運な立場に留めるのに働いていることを知ったのである。Vermilyeの道徳についての説明は，成功している人間のmoraleを強化する様に，失敗した人間の勇気を挫き，その失敗に相応する貧しさは当然の報いであることを信じさせようとするものであった。Melvilleは，自分の文化の内側にある膜をつき抜けて，Aliceが鏡の中を通り抜ける様に，自分の人生の意味が奇妙に逆転する世界へ入り込んだのを知った。心の中では，依然として若い貴族（patrician）だが，自分の様々な経験が，全体として自分が下層階級の人間であることを主張している。特権階級と貧困者とを分けている界面を通り抜ける時，Melvilleは新しい位置を与えられたのである。道徳全般にわたる参照体系（general moral reference system）が，道徳の現実は神を宇宙の中心とする体系によって表現されるという保証によって，人生に対して彼を落胆させるような新しい意味を持つ様になった。Melvilleは，自分には偽りと分っているが，優れていることを当然と考える連中によって成り立っている組織的な侮蔑をチクリと刺す痛みに感じた。そして，社会的に彼よりも優位にある連中によって示される独りよがりな侮蔑に怒りを感じるようになった。しかもその様な非難は，自分の性格が形成されてきた伝統的宗教観に基づいて行われている。自分に対しての有罪宣告を受け入れる以外に取るべき道は，今自分が堪えている難儀は，神を宇宙の中心に置く道徳的秩序の中では，全く何の意味も無い，という可能性を探ることであった。そして，このtheocentric systemは，彼が直面する現実の典型として，依然として効力を持ち続け，そのsystemによる有罪宣告に対する怒りは，それを表現する根拠が別に存在しなかった故に，一層いらだたしいものであった。』[17]

1832年に，キリスト教信者としての模範であり，家族の幸福を保証する力でもあった父親を失い，それから僅か5年更に家業を継いだ兄Gansevoortの破産を迎え，少年から青年へと成長する時期にあったMelvilleが，急激に下降する家族状況の中で，自らの人格が形成されてきた伝統的宗教観，道徳体系の根本に存在する神の権威に対して，疑問を抱き始め，又怒りを感じ始める様になって行く過程をHerbertは細かく分析している。特に，優越感を抱いていた上流階級の繊細な，読書好きで信仰心の篤い少年が，突然に訪れた逆境に直面して，その現実の意味を理解しようと苦しみ悩んだことは当然であり，しかも不運

なことに神を根本的権威とする道徳体系の中で，自分が有罪宣告を受ける立場にあるのではないかと全く仰天せざるを得ない認識を迫られて，困惑した思いや苦悩は深まるばかりであったろうと思われる。

Herbert の推論は，ここで始めて，'Melville の theocentric system による判決(verdicts)に対する怒り'という考え方を持つのであるが，これは，これから展開する Herbert の主張の重要な点である。

III

Melville は，Albany の YMA に附属する debating society である Philo Logos Society の会員であった。Melville が，Pittsfield 近郊の Sikes District School で教員をしていた間留守をしていたのだが，1838年の1月，Albany へ帰って見ると，この弁論会が活気を失っているのを知ったのである。会長を出し抜いていわゆる緊急の臨時集会(a rump session)を開いて，自ら新会長に選ばれたのである。この一連の人事は，Albany Evening Journal (Fe 6 . 13. 1838) に発表された。意表をつかれて会長職を解かれた若い Baptist の牧師になるべく勉学中であった青年 Chardes Van Loon が，怒りの余り Albany Microscope 紙 (Fe 6 . 17. 1838) に，Melville を会長にした選挙や，それが行われたとする Stanwix Hall なるものの存在など全てを真向から否定する声明文を SANDLE WOOD の筆名で発表した[18]。これに対して，Melville は PHILOLOGIAN なる筆名で，Microscope 紙に反論を発表，相手を言葉を極めて攻撃した。

> .... In every community, there is a class of individuals who are of so narrow-minded and jealous a dispotition that deserving merit when developed in others, fills their bosoms with hatred and malice .... Their breasts swell with envy, and they endeavour to villify and abuse .... In the VAN of these notables worthies stands pre-eminent, that silly and brainless LOON who composed the article .... denying the existence of the Philo Logos Society ....[19]

これに対して，'Ex-President'は，Melville を再び攻撃する声明を Microscope 紙 (March10. 1838) に発表している。

> I will inform the members of the Philologos Society, that it is none other than he, whose "fantastic tricks" have earned for him the richly merited title "*Ciceronian Baboon*" , but I shall lead him up before the public under the more romantic appellation of Hermanus *Melvillian* ....[20]

そして遂に，この'Ex President'である Van Loon は3月30日の Microscope 紙上で，Melville を，'a child of the devil, full of all subtility and all mischief'と攻撃している。

Melville と Van Loon の両者が，debating society の leader らしい rhetoric を駆使してお互いを罵倒しているが，やがて急速にこの論争は終息する。

Herbert は，この論争の中で，若い牧師が，Melville を，'a child of devil'と呼んだことに注目して『Melville が，成人して，悪魔の意志（devilish will）に惹かれていたことに気付いている読者は，この Van Loon の Melville に対する侮辱の中に予言的示唆があると思うであろう。Melville は，この若い Baptist に対する怒りの背後にある宗教的葛藤を探求する様になった時，益々悪魔の言語（The language of the demonic）に惹かれるようになった。この言語は，theocentric system に基づく見解に反対する Melville の考え方を表現する方法を与えたのである。Melville は，相手を非難するのに用いる言語を，theocentric system に対する根本的な反抗の idiom に変えたのである。この悪魔的なものという思想は，一連の用語以上のもの，即ち精神的足場（spiritual stance）を与えたのである。Melville が，悪魔的意識を次第に身につけたのは，theocentric な思考の型から離れて，独自の精神性（spirituality）を持とうとする努力であった。Van Loon との論争は，偶然であり一時的な怒りを示したものに過ぎないが，彼の宗教的 dilemma に対する一瞥を我々に与えるものである』[21]という見解を述べている。

Herbert の見解は，Melville の作品，特に Moby-Dick を詳細に分析した立場からのものであって，興味深い。しかし，勿論，Melville がこの時期に既にその思考に devilish な傾向を見せていたかどうかを知る材料は無い。しかし，Herbert は，Melville が自分の家族を"one to whom Providence has brought unspeakable and peculiar sorrows"[22]と述べたり，"Typee"（26章）や Omoo（37章，48章）で，missionaries を攻撃していることを取り上げて，Van Loon に対する怒りの背後にある Melville の屈折した複雑な思考を次の様に推論している。

『Melville が継承した自由主義的な信仰と Calvinistic な信仰の対立は，最早'Melville' Family の名声による安定した意識で和らげられるものではなかった。今はそれどころか，この対立は一層悪化したのである。それは家族が蒙った不名誉についての宗教的意味をどう判断するかで混乱してしまったからである。Melville の家族は，人間の計算，努力や希望を全く無視する Calvinistic Providence のように行動する，測り知れない運命（inscrutable fatality）の摂理と思われるに違いないものによって貧窮の中へ追い込まれたのだ。Melville の家族の誇りは，外面的な破滅の中で依然として生き残っていて，独りよがりに自己を正当化する人間に対して激しい怒りを向けたのである。しかしそれは同時に，Melville の懐疑主義の深いレベルの部分を活気づけたのである。Van Loon に対する怒りは，社会的に支配的な立場が宗教によって与えられている者に対して示されるものである。'Typee'や'Omoo' での，彼の攻撃の持つ説得力は，Melville の怒りが，しっかりとした倫理的洞察に至ったことを示している。Melville の宗教的問題に対する没頭は，全ての問題の中で最も基本的な点に集中するようになった。即ち，道徳的判断を正当と認めるには，いかなる神の真理

に頼れるのであろうかという疑問（The question which asked what divine truth could be invoked to authorize moral judgments）であった。この疑問がどのような形を取るのか，それがどのようにMelvilleの幼い時の経験が与えた宗教的謎（religious enigma）を再考させるのか。これらを理解する為には，こうした先入主(preoccupations)が頭に浮かんでくるMelvilleがMoby-Dickを書いている時期に目を向けることである。』[23)]

Herbertは，Van Loonに対する怒りは，Melvilleの経験によって生じている先入主(preoccupations)の最初の表われであるとしている。そしてこれらの先入主は，'Typee' 'Omoo'を経てMardiに至り，やがて，Moby-DickでarticisticにIに表現されることを述べている。

Ⅳ

1838年5月，Melvilleの家族は，Gansevoort破産後の逼迫からAlbanyの北の小村Lansingburgへ移る。New Yorkの友人Bradfordを頼って法律の勉強に出ていたGansevoortが足首の痛みから病を得て帰っている。この年の11月，教員を止めていたMelvilleは，技術，測量の勉強をしようとLansingburg Academyへ入学する。叔父のPeterの助力で，Erie Canalの大工事に職を得ようとするが結局は無駄な骨折りに終ってしまう。1839年4月，Melvilleは，地元紙Democratic Press and Lansingburg Advertiserへ自分の文学作品として最初のものである'Fragments from a Writing Desk'を掲載されている。やがて病から回復したGansevoortは，弟のAllanと共に再びNew Yorkへ出る。職の見付からないMelvilleは，兄Gansevoortに頼んで，船員の口を探して貰い，雑役夫として，商船St. Lawrenceに乗り組み，6月5日New York港からLiverpoolへ向って出帆する。この時のMelvilleについて，Leon Howardは，こう記している。「目的は何であったにしても，――自分自身を見出そうとすることであれ，いまだ未熟な文学的野心を満すための材料を得るためであれ，或いは単に自分の生計を立てるためであれ――Melvilleは，世界を目前にして，健康であり自由であった。Melvilleは，（家族の為に）果すべき義務（duties and obligations）から逃避しようとしたのでは無かったが，彼の行動は二度と家族会議によって決定されることは無くなったのである。彼の前に続く長い道程は，彼が選ぶ方向へ通じていたのである。」[24)] 9月Liverpoolから帰ると，Lansingburgに近いGreenbushで，再び教員を勤める。Democratic Press11月16日号に，Melvilleのものと推定される'The Death Craft'が掲載されている。

1840年，Greenbushの学校が経済的理由で閉校になり，Brunswickで2，3週間教員を勤めるが，6月，友人のFlyと叔父のThomas Melvill Jrの居住するIllinoisへ職を求めるために出掛ける。

しかし，この年の経済不況の波に洗われて，Thomasは，Galenaの商業会議所の役員などをしていたが，人口2千足らずの町では羽振りが良い程でなく，とても甥の就職口を世

話するどころではなかった。Melvilleは，学校教師の口があるという情報を当てにしていたらしいが，不景気でGalenaにある僅か二つの学校も，一つは閉鎖されて貸家になっている有様であった。秋に入る頃，Melvilleは再びFlyと共に来た道を逆に辿って，11月半ばNew Yorkへ帰る。Gansevoortは，依然として病い勝ちであったが法律の勉強をしていた。この頃Richard Henry Dana JrのTwo Years Before The Mast'が，New Yorkで人気を呼んで，Melvilleはこの本を'strange, congenial feeling'を抱いて読んだらしい。「大西洋は，Melvilleに18ヵ月に及ぶ失業状態という一時的な問題から逃れる手段を以前に与えていた。経済的困窮という問題がいつまでも続きそうに思える今は，大西洋は，その広さと家から離れる距離によって，今までより，長期間にわたって，以前と同じ目的に役立つかも知れない。」[25]Melvilleは，Gansevoortと相談して，捕鯨船Acushnetに乗り組むことにする。

1840年，12月31日，Melvilleは，住所を'Fairhaven'として，一般船員として乗り組む文書に署名をする。「これから船出しようとしている冬の荒涼としたNew Englandの海岸に目を向けた時，Melvilleは安緒感を決して伴わない逃避感を抱いたに違いない。彼を長い航海へ旅立たせる自尊心は，冷くなっていた。そしてそれから殆んど4年の歳月を経て，この旅から帰ってくるのであった。」[26]

1844年，南大平洋での経験を収穫として，Melvilleは，Lansingburgへ帰り着く。Melvilleが25歳の秋であった。Melvilleが文筆生活に入る動機として伝えられていることは，家族の誰かが"Why don't you put in book form that story of your South Sea Adventures which we all enjoy so much?"[27]と言ったことが発端となったらしい。現実的には，'to put money in his purse'が，作家を職業としたのであろう。1846年2月'Typee'が，Londonで，次いでNew YorkのWiley Patnamから出版される。売れ行は好調であった。この年の5月，'Typee'の原稿をLondonの出版業者John Murrayと交渉してくれたGansevoortが，Londonで病死する。30歳の若さであった。

この年の12月頃には，第二作の'Omoo'が完成，1847年には第三作にとりかかっている。1847年，'Omoo'のイギリス版，アメリカ版が好調に売れる。3月，最初の文芸評論'Review of Etchings of a Whaling Cruise, by Ross Browne & Sailor's life and Sailor's Yarno, by Captain Ringbolt'をEvert Duyckinck編集の'The Literary World'に匿名で掲載する。8月，BostonのNew South Churchで，Melville家の長年にわたる友人であり保護者であったとも言える判事Lemuel Shawの一人娘，Elizabethと結婚し，New York市に新居を構える。

1847年から，48年の冬にかけて，妻のElizabethが驚く程，それこそ火の気の無い部屋に閉じ込もって，Mardiの執筆に取組んでいる。1849年，Melvilleが，Mardiの最後のゲラ刷を読んでいる頃，妻ElizabethはBostonへ行き，2月16日長男のMalcomが生れる。彼女が産褥から離れる頃にMardiの最初の書評がLondon Athenaeumに現われている。"Mat-

ters become crazier and crazier .... more and more foggy .... page by page .... until the end .... is felt to be a happy release"この酷評は，Melvilleの自尊心をひどく傷つけたが，一層経済的に困ることであった。このMardiは，'Typee'や'Omoo'が好評であったのに反して全く不評で，Melvilleが死亡する1891年までに2,900部しか売れなかったということである。Mardiの不評を挽回するために，そして妻子を養い家庭を維持する為に，春から夏にかけて，'Redburn'と'White-Jacket'を書いている。'Redburn'は，イギリス版が9月，アメリカ版は11月出版され，'White Jacket'は，Londonの出版業者Bentlyと契約を結んでいる。1850年，'White Jacket'が2月にLondonで，3月にNew Yorkで，それぞれ出版される。この年の8月，Hawthorneと初めて出逢って，'Literary World'（8月17日号，8月24日号）に，'Hawthorne and His Mosses'を匿名で発表している。9月Melvilleは義父のLemuel Shawに金を借りて，Pittsfield近郊の農家を買い，'Arrowhead'と名付けて家族と共に移住，10月の初め頃から住み始める。

V

Thomas W. Herbertは，'Moby-Dick and Calvinism'の1部，4章'Sane Madness'で，1850年，Melvilleが，'Redburn'と'White-Jacket'が出版されて，やがて次の作品に取り掛ろうとしている頃から，MelvilleのMoby-Dickに至るまでの内面の過程をたどっている。

『Melvilleは，1850年6月27日に，Londonの出版業者Richard Bentlyに手紙を書いている。「自分は，今，'romance of adventure'を，南海の'抹香鯨'の漁業についての突拍子もない伝説に基いて，私自身の2年以上に及ぶ銛射ちの経験で分り易く具体的に，書いています。」』[28)]

Melvilleは，この作品は，秋の終り頃には完成すると期待していると書いているが，それが予定した時期には出来上らないと知って，それを9ヵ月の時間をかけて'Moby-Dick'に書き直している。この点については，研究家の間での意見として，「Melvilleの内部に何らかの葛藤があったのであろう。そしてそれは，HawthorneとShakespeareが与えた影響によるものであろう」という指摘がある[29)]。Herbertはこの点について，『Bently宛の自信に満ちた手紙の背後に，一種の精神的葛藤が待ち受けていて，それが創造力と，精神の危機の不吉な前兆（The portent of creativity and psychic danger）を伴っていたのである』[30)]と述べている。

HawthorneとShakespeareの影響を認めながら，Herbertは次の様に主張している。『これらの影響や，Melvilleが，'Redburn'や'White-Jacket'によって，Mardiの不評から回復しつつあった状況が，Melvilleの内部にあった取り扱いの難しいものを，何とかまとめようとする力を与えたことが非常に重要である。心理的葛藤は，その荒れ狂う力に堪えられるようになるまでは休止するが，Melvilleがこの時期に基本的に幸福であったことによって，彼は，以前から悩まされてきた思考や感情を解き放つことができたのである。

Melvilleは，'Hawthorne and His Mosses'の中で，彼固有の葛藤と，自分の中にふくれつつある野心とを明らかにしている。このessayの中には，論理的非連続性（logical discontinuities）があるが，それは，Melvilleの初期の作品の表面下の混乱（subsurface dislocations）と一致している』[31]

Herbertの言う論理的非連続性とは何を指しているのか，以下に要約してみる。

『Melvilleは，Hawthorneを称賛する際に，自分が選んだ崇高な文学的使命(the exalted literary mission)の輪郭を描いたのである。Mardiの失敗から回復したことを喜んで，Mardiの予言者的熱情（prophetic zeal）を再び表現する。Melvilleは文学における偉大さの基準（criterion of literary greatness)は，'真理'への到達である。いかなる天才も，測鉛(plummet)のように宇宙へ下りてくる偉大で深い知力なしでは存在し得ない。Shakespeareの偉大さはその思索にあるとして，「ShakespeareをShakespeareたらしめているのは，彼の中にある深く遠いもの，時折ひらめき出る直観的真理(intuitive Truth)，現実の軸そのものについての短く鋭敏な吟味である」[32]そして，Hawthorneの洞察(vision)の深さは，Shakespeareに匹敵すると主張しながら，'There are minds that have gone as far as Shakespeare into the universe'という表現で，Shakespeareに並ぶ位置にHawthorneと自分自身を格付けている。Melvilleは，Hawthorneが，Shakespeare程有名でないことを認めざるを得ないが，Hawthorneは，人気を呼ぶ雑音を立てたり，馬鹿げた道化，血塗られた悲劇を見せることを避けて，静隠な知力ある人間の発言で満足していると説明する。そしてHawthorneが比較的知られていないことから，真の芸術家とキリストを並べる驚くべき比較をする。即ち，Hawthorneは，アメリカのLiterary Shiloh（Christ）であるとまで言う。Melvilleは，「アメリカにおける経験によって，これまでの時代の英知を超越する真理への新しい到達（large new accessions of Truth）を芸術家は可能にする。新しい魅力や，神秘を後世の人間が見出せない程に自然が先人によって略奪されてはいない。現代の作家を不能にしているのは，材料にひどく不足しているというよりは，過分にあり過ぎるからである。Literary Shilohが包容力のある精神で，この過分にある材料を吸収し，それを宇宙への航海の目的に合わせて処理する」[33]ことを想像している。

Melvilleは，「Shakespeareに対する崇拝は，民主主義的な文化には適さないもので，許容できない。Shakespeareを偶像視する代りに，アメリカの大衆は，アメリカの功績のある作家（meritorious writers）を正当に認めるべきである —— 全ての事の中に，あの自由に解放された，民主主義的なキリスト教精神を吸い込んでいる作家たち ——。

アメリカの予言者(literary Shiloh)は，英国の文化的伝統の卓越性に挑戦し，創造的知力の無限の可能性に対して持つ民主主義的確信を例証するであろう。」[34]Melvilleは，キリスト教のliberalな信仰を土台とするアメリカ人の文学に示す努力に支持を求め，アメリカの体制では，全ての人間は生存の尊厳を有し，宇宙の最も深い秘密へ等しく到達できることを暗に意味している。しかしながら，Melvilleの溢れるばかりの文学的ナショナリズム

の突出は，その宗教的支え（religious underpinning）と矛循するいくつかの同じ程に熱烈な強調によって複雑になるのである。

Melvilleが，Hawthorneの偉大さの鍵と考えている'暗黒の力'（power of blackness）は，人間の精神的尊厳の存在を信じることと一致するが故に読者を納得させるのではない。むしろ逆に，「その暗黒の力は，生得の堕落と原罪（Innate Depravity and Original Sin）というCalvimisticな意識にそれが訴えることから力を得ている。というのは，深くものを思う人の心に何かの形で訪れてくるその意識から常に，全く自由であるとは言えないからである」[35]Melvilleは，アメリカは，楽観的な〝共和主義の体制の進歩主義〟を必然的に信奉せざるを得ないと主張するにも拘らず，「この世の中を測ろうとする時に，平衡を保つために何か原罪のようなものを投げこまざるを得ない」[36]ことが不可欠であるとしているのである。

Melvilleは，「'このharmless Hawthorne'ほど，このぞっとする考え（terrific thought）をより恐怖を感じさせるやり方で用いた作家はこれまでに多分いなかった。」[37]と信じることによって，HawthorneをShakespeareと比較することになったのである。「Hawthorneの背景に，正体の知れないものを与えている〝暗黒〟（blackness）は，Shakespeareがその最も壮大な想像力（hin grandest conceits）を働かせたと同じ背景，Shakespeareに最も深遠な思想家として，最も高いが，最も制約された名声をもたらしたものであるからである」[38]HawthorneとShakespeareの最高の名声が，同時に'最も制約されたもの'（circumscrived）であるのは，正に，原罪の概念を用いる時の恐怖が，彼等に真の偉大さを与える予言者的洞察を作り上げているからである。Shakespeareは，キリスト教的な自由主義が土台としているものをかく乱する程の大胆な洞察によって，〝暗黒〟という錘りをたらし，人間の精神の探求は，狂気に至るかも知れないことを唆めかしている。Shakespeareの'現実の軸の究明'（probings at the axis of reality）は，「Hamlet, Timon, LearそしてIagoという暗い人物を通じて伝えられる」。これらの人物を通して，Shakespeareは，「我々が恐しい程に本当であると感じることで，いかなる善良な人間であれ，その性格から，それを口に出したり，ほのめかすことですらしても，狂気の沙汰と思われる様なことを，巧妙に言ったり，或いは時に，それとなくほのめかしたりする」[39]Shakespeareは，自らの宗教的洞察の本質（The living essence of his religious insight）をあいまいにせざるを得なかったが，「狂気の王リアが，苦悩の余り絶望し，仮面を剥ぎ取って，'正気の狂気の根本的真理'（The sane madness of vital truth）を口にする時はじめて明らかにする」[40]

Melvilleは，アメリカの作家が，アメリカで称賛されるべき土台として進歩主義や自由主義的な考えを押し進めるが，作家を真に偉大ならしめる洞察は，（ShakespeareやHawthorneのそれ），その作家の人気（popularity）を危くするということに気付いているのである。'正気の狂気の根本的真理は，大衆の消費には適さない。Shakespeareでさえも，「この嘘に満ちた世界では，真理は森の中のおびえた白鹿の様に跳んで逃げ去る他はない

のである。そしてそれが姿を見せるのは，巧みにちらりと一瞥できる時だけである」[41]ということを発見したのだ。Melvilleは，Hawthorneは，彼のsketches(Mosses from an Old Manse)の真の意味を，一見取るに足らないような題名—表面をさっと読む人(superficial skimmer of pages)をとてつもなく欺くように計算された題名—の裏に隠したのだと信じるようになった。Melvilleは，本当に言いたいことをあいまいにしておかないと，アメリカ文学のShilohは，十字架上でのはりつけのようなもので迎えられるかもしれないと暗に意味しているように思える。Melvilleは，アメリカの大衆にアメリカの作家を間違った理由で称賛するように言っているが，この事実は，Melvilleが二枚舌を使っているのでもないし，彼の人間の精神に関する発見を隠そうとする体系的計画へ彼を導いてはいない。』[42]

Herbertが，'論理的非連続性'と言った意味がこれで理解できる。Melvilleは，'真理'を測るには，その探求が人間を狂気へ導く危険のある，カルビニズム的な暗黒——ShakespeareやHawthorneを偉大な作家としている要因——が不可欠であるとしながらも，自由に解放されたキリスト教精神を持つ作家——しかもこの精神がアメリカの作家がアメリカで称賛されるべき土台なのであるが——を正当に認めるべきであると主張している。しかし，この段階では，Melvilleは，カルビニズム的な錘りをたれての'正気の狂気の重大な真実'の探求を体系的に隠そうとする意図は持っていなかったと，Herbertは主張している。Herbertは，ここで，Lawrance Thompson (Melville's Quarrel with God) が，「Melvilleは，Moby-Dickを書くずっと前に，精神的混乱を終えて，神に対する妄執的で揺るぎない憎悪を，作家として生計が得られるやり方で表現するという問題に直面していた。Melvilleは自分の真の意味を隠蔽するいくつかの手段を考えなければならなかったのだ」[43]と主張している点を取り上げ『Thompsonは，主題の不一致 (thematic inconsistencies) を正しく観察している，そしてMelvilleの肯定的な宗教的願望 (positive religious aspirations or beliefs)を示唆するpassagesは，Melvilleの心からの瀆神を隠そうとする表面であると主張しているが，Melvilleは，Moby-Dickを書こうとしている段階では，宗教的な事柄についての取扱い方がはっきりと定まっていなくて，Melvilleの苦悩には，明るい肯定的信仰を得たいという真剣な渇望があった。Melvilleの作品にある多様な衝動的箇所は，単にstyle上の操作を表現しているのではなくて，彼が内面的に確かなものを持っていなかった徴候である』[44]と，Herbertの見解が，Thompsonのそれとはっきり相違していることを示している。Herbertは，MelvilleがMoby-Dickを書こうとする時，自由で民主主義的なキリスト教精神を称賛する熱意と，カルビニズム的な'暗黒'を真理に到達するための測鉛として不可欠なものであると思い，両者の間での決定的選択をしていなかった。従ってカルビニズム的な'暗黒'を隠す意図はなかったということである。

Herbertは，更に次のように述べている。『Melvilleは芸術家は，'暗黒の力'に身を委ねて，狂気と思われる程に世界についてのカルビニズム的理解を求めるべきであると感じたのである。この企ては，それが苦しさの余りに狂乱に達すると，'重大な真実'についての陳

述を生む，ということであった。しかし，Melvilleは，人間の宗教的洞察力は，その様な苦悶に満ちた歪みを経験しないでも，真理に直接到達できるという自由な信仰(liberal belief)と調和する穏やかな，たっぷりとした精神（serene amplified of spirit）を熱望しているのである』[45]このMelvilleのliberal beliefへの熱望の表現として，Herbertは，Hawthorneの'blackness'とは全く反対の面に対するMelvilleの称賛を挙げている。『この陽気な宗教（religion of mirth）は，全ての形の存在に限りない共感を示している。そしてそれは，その規模と柔軟さで，'遍在的な愛'(omnipresent love)に近い』[46]Melvilleは，Hawthorneを，'瞑想的なユーモア'（contemplative humor），'精神的に優しく，天使にあっても相応しい程の高邁で深く豊かな味わいのあるユーモア'(a humor so spiritually gentle, so high, so deep and yet so richly relishable, that it were hardly inappropriate in an angel）の故に称賛しているが，Melvilleは，予言者的天才の持つ対照的な面が，相補的であると信じたかったのである。そして，それらの対照的な面の調和を示唆する一連のイメージを呈示する。「天国の陽光が，Hawthorneの魂の一面を照らし出しており，もう一面は暗い世界の半分の様に，暗黒に包まれている」と述べ，暗黒の闇に躍る神の輝きを象徴するために，雷雲の輝く縁を引き合いに出している。Melvilleが，この世の中を測る時に平衡を保つために，Original Sinを投げ込まなければならないと言う時，Melvilleは平衡(equilibrium)，賢明に釣合っている'真理'の到達を主張したのである。』[47]

Herbertは，『Melvilleのこの宗教的葛藤は，上述した内容に即して言えば，平衡の取れた真理の探求への錯綜した思考は，Melvilleが自分の洞察を基本的な宗教的信仰の枠組みの中へしっかりと収められないことを示している。Melvilleは，自分の抱いている先入観（preoccupations）によって，真理の体系が，自分が用いることのできる用語（terms）では，公理化することができないのではないかという疑いを持ったのである』[48]と推論して，'Hawthorne and His Mosses'に読み取れるMelvilleの混乱（dislocatuins）を説明している。

Ⅵ

Herbertは，Melvilleがカルビニズムの信仰に基く，'power of blackness'を真理の究明に不可欠な測鉛としながらも，依然としてHawthorneの持つ「楽しい，共感的な精神性(a joyous and sympathetic spirituality）を発揮して，'真理'に対する洞察（vision of truth）を得たいという願望は，Melvilleの中に明らかに見られるとして，その願望の成就を，Mardiのthe island of Seneriaで，アレゴリーとして表現しているとする。そしてこのSeneriaの宗教は，自由な信仰のUnitarianismに影響されているとして，William Ellery Channingの論文を引用して，MardiのSeneriaの宗教と対照させている。

『Channingが，「キリスト教は理性の宗教である」と主張する時，彼は，「神の啓示は，人間が道徳的，理性的性質（moral and rational nature）の深い部分で知っていることを

人間に対して明らかにするだけである」[49]と言ったが，同様に，Serenians は，「真・義・愛は，Alma（=Christ）のみの啓示であろうか。Alma が来るまで，それらのことを耳にしなかったであろうか。Alma はただ我々に対して我々の心を開いて下さるだけである」と言う。Channing は「‥‥キリスト教は，理性と斗うものではなくて一体のものだ。そして理性を助け，友となるように与えられるものだ。理性には二つの機能がある。キリスト教に活気づけられて，理性はこれらの機能を全く独立して行う。これらの機能とは，普遍的真理の探求(search for universal truths)であり，それらに整合性と統一を与える(reduction of these truths to consistency and unity）のである。理性は，真理を広範囲にわたって探究する時，キリスト教の様々な証明（various proofs of Christianity）を集め，測ってみなければならない。理性は，キリスト教という体系を，偉大な道徳的確信（great moral convictions）と比較しなければならない。そしてこれらの道徳的確信は，神の手によって人間の心に書き留められ，人間に人間自身の法則を作り与えるのである。』[50]

Herbert は，『Channing の見解は，正しい理性 (right reason) の歴史的概念に一致している。Channing は，キリスト教は，人間の理性を高揚し，神性と合一させる(Christianity elevates man's rationality to an exalted communion with the divine)，そして神の本性についての重大な真理と，人間の理性の真正さは相互に確認される，(The vital truth of God's nature and the authenticity of human reason are reciprocally confirmed）と信じている』[51]と述べて，正しい理性についての概念が，Mardi の中で Serenia の代弁者（老人）が，信仰に理性と食違い点がありはしないかという非難に対する答えの中に反映していると指摘する。

「……いや，正しい理性と Alama は同一である。さもなければ，理性ではなくて Alma を斥けるだろう。

われらが主の大いなる命令は愛である。この愛に，賢きことの全てや善きことの全てが統合される。愛が全てである。愛すれば愛する程，一層多くのことが解り，その逆も又しかりである。」(Mardi p. 629）この老人の Alma の宗教における理性についての陳述は，正に Channing の説の通りであり，Melville の称賛した Hawthorne の，「遍在的な愛(ompipresent love)が，真理を求める知力の判断と一体になっているように思える」と，Herbert は，Melville の'正しい理性'への熱を帯びた傾斜を指摘している。

しかしながら，Melville はこの Serenia の宗教の幸福な状態に惹かれながら，この Mardi におけるアレゴリーには，一種の強い反動 (forceful recoil) があるとして，Taji が同伴する 4 人の探求者の忠告を拒否する場面を，Herbert は指摘する。

『Taji に同伴する 4 人の探求者は，この人道的で自由な信仰(humane and liberal belief)を受け入れるが，Taji は拒否する。Taji は，Serenia を Spiritual home にするようにと勧められるが，絶望的狂乱に我を失ってしまう‥（a desperate frenzy overwhelms him)

"Then, then! my heart grew hard, like flint; and black, like night; and sounded hollow to the hand I clenched. Hyenas filled me with their laughs; death - damps chilled my brow; I prayed not, but blasphemed"

(‥‥ぼくは祈らなかった。神を冒瀆するだけだ) (Mardi p. 639)

Melvilleは，この冒瀆に明白な知的内容を与えていない。TajiがSereniaの宗教を棄ててまでしようとする探求の意はここでは与えられていない。しかしMelvilleによるこのSereniaの呈示そのものは，束縛されない自由な理性 (untammeled rationality) の称賛の中に，或る矛盾が存在することを示唆している。』[52)]

Herbertは，この'正しい理性'，'束縛されない自由な理性'の中に在る矛盾は何かを示すために，SereniaのOracleの問答の場面を引用し，Melvilleの抱く根本的な宗教的葛藤に迫っている。

『SereniaのOracleは，'考える力もない' '罪深い生活'を考えることもしないで送り，信仰によって再生することもなしに死ぬ人間にはどんな運命が待ち受けているのか？'と問われて，'罪は死なり' (Sin is death) と答える。'それでは'と私は低くうめいた。'罪を犯し，受難する人間の子 (germs) を何故創造されたのであろうか？ただ滅びるだけのためにでしようか？'

(....Why create The germs that sin and suffer, only to perish?)

私の道案内は言った。'それが，一切の神秘の底にある究極の神秘だ。大天使でさえこの神秘は測り知ることはないかも知れない。しかしそれがOro (神) を永遠の神秘にしている。それを解き明すことは，Oroと対等に，この世に在る全ての魂を知ろうとすることだ。Oroはこの神秘を閉ざし，他の誰にも知れないのだ。

「.... That is the last mystery which underlieth all the rest.
Archangel may not fathom it; that makes of Oro (God) the everlasting mystery he is; that to divulge, were to make equal to himself in knowledge all the souls that are; that mystery Oro guards; and none but him may know.」(Mardi pp. 634—635)

『Melvilleは，Channingの'真理を探求する者は，自らに法となり得る。何故なら人間の道徳的本質と神の本質は，宇宙的調和の中に包含されている'，そして'宗教的真理は，神が人間の心に書き留めた偉大な道徳的確信に照らして吟味しなければならない'と言ったが，Oro (God) は，'罪を犯し，苦しみただ滅びるためだけに人間を創造し給う'というSereniaの宗教を呈示することで，Oroが閉ざす神秘は，'徹底的な道徳的不完全さ'(drastic moral inadequacy) を隠しているのではないかという疑いを表現したのではなかろうか。Melvilleは，真理を探求する者にある'全ての形ある存在に対する限りない共感'は，神 (Being) の性格にある遍在的愛を探求する者に発見されるというChanningの説を信じようとしたが，

Channingの説と自ら抱いている思いとは，究極的には一致しない（ultimate discord）という疑いを沈黙させておくことができなかったのだ。この疑問の追求は，神の本質に対する疑いとなる。Oroが閉ざしている秘密の根本的意味を追求するとき，究極的な道徳の基準が理解できなくなる。'真理'(Truth)そのものが，狂気と理性(madness and rationality)についての価値観を決定する基準として崩壊する。究極的真理に関して二つの相対するものとしての狂気と正しい理性（madness and right reason）は，本質的には，一様な心の活動の二つの極端にある変形した活動（two extreme modifications of an essentially uniform activity)である。それらは，経験の持つ意味の中に，彼方にあるもの，(神)（the Byond)の性格を読み取ろうとする人間の心の自律的努力(autonomous effort of The mind)である』[53]

Herbertは，Melvilleが，Serenaの宗教，Oroの閉ざす神秘をMardiの中へ持ち出したのは，狂気と正気についての当惑するような結論を持ったことがあることを指摘しているが，それを例証するものとして，Melvilleが，ShakespeareのThe Dramatic Works 7 vols.（Boston 1837）のⅦ3rd. rear flyに遺した書きつけを示している。

「狂気とは定義できないものだ。狂気と理性は，同じものの両極端だ。

(Madness is undefinable, it & right reason extremes of one) —— (Luther Mansfield と Howard P. Vincent は，Mardiの完成後，Moby-Dickを仕上げる前に書き遺したと主張している ——)」[54]

Howardは，以上の点から次の様に，MelvilleのMardiにおける精神的姿勢を述べている。

『MelvilleのSerenaの扱い方は，正しい理性の伝導者（apostles of right reason）は，悪(evil)についての基本的疑問を避けることによって，狂気から安全な距離を保つことができることを示唆しているように思われる。(Channingの)Unitarianの楽園が，人間の道徳的，精神的自立の表現として示されているが，それは奇妙な形の屈従（a peculiar form of subservience）であって，その状態では，探求者は，Oro（神）に対して，人間は受けるに値しない難儀(undeserved suffering)の理由を聞きただすことを禁じられている。Serenaの自由なoptimismは，爆弾の上にあぐらをかいているようなもので，その隠されたヒューズが，'根本的悪の狂気の意味'（the mad meanings of radical evil）を恐れを知らず探求する者によって点火される可能性がある。』[55]—— しかしHerbertは，このような破壊的結論に達することを欲していなかったと主張する。

そしてMardiにおけるMelvilleの精神的探求のもつ意味は，全く一時的(provisional)であり，Serenaを公然と非難してはいないし，神を間違っていると攻撃してもいないとして，Melvilleが依然として，神＝根元的悪の疑いと，神の本質に迫る探求でのUnitarianismに対する疑問を，呈示しているに留まっていることを主張している。

しかしながら，この人間の'undeserved suffering'の根元についての疑問，形而上学的意

味は，依然として，Melville の抱えている宗教的葛藤であることを示すものとして，Redburn と White-Jacket の中で表現される Melville の考えを挙げている。

『Melville が，「'現実の本質的構造' (essential structure of reality) は，神の博愛 (benevolence) によって決定される」と信じたい欲望は，その論理がカルビニズム的であり，その内容 (substance) は狂気 (insane) である対立した見方 (vision) によって脅かされて行く。Redburn の中で，救済されない人間 (the unredeemable) の悲惨についての Melville の思いは，Jackson に集中する。Jackson は，呪われた生活 (hellish existence) に永遠に陥し入れられて，伝染性の瀆神的精神にとりつかれている。「彼は浮かべるカインだ。その黄色の額には，測り知れない呪いの烙印が捺されて，近くで鼓動するすべての心を腐らせ，麻痺させようとうろついていた」—— He was a Cain afloat; branded on his yellow brow with some inscrutable curse, going about corrupting and searing every heart that beat near him. —— (Redburn p. 104) Melville の，若い主人公は，この神の呪いを身につけた男を怖れるが，結局はこの男を非難できない。「この男が漂わせている雰囲気は，悪というより悲しみだ。そして彼の悪はその悲しみから生じているようだ。彼のおぞましさにも拘らず，その瞳には時折消しがたい程に憐れで，感動的なものがあった。この Jackson を憎む程の気持になる時もあったが，彼程，私がこれまでに憐んだ人はいなかった。」—— There seemed even more woe than wickedness about the man; and his wickedness seemed to spring from his woe; and for all his hideousness, there was that in his eyes at times, that was ineffably pitiable and touching; and though there were moments when I almost hated this Jackson, yet I have pitied no man as I have pitied him." (Redburn p. 105)

Melville は，Jackson の受難を彼の罪に対する罰としてではなくて，罪の理由 (reason for it) と解釈している。Melville は，Calvinistic doctrine を眺め，Jackson を神の inscrutable curse の犠牲者としている。そして，Jackson は，自らの邪悪に対しては，責任がないということを示唆している。

White-Jacket の中で再び Calvinistic idea を採り上げて，その容貌を角 (horn) によってひどく傷つけられた (disfigured) 女性の悲惨 (wretchedness) を考えている。「この角は，霊が肉に入る以前に，宿り，犯されたある神秘的な罪に対する呪いの記号のように見える。しかしながら，その罪は自発的に求めたものではなくて，強要されたように思われた。世の事の予定運命による無情の必然から生じた罪のようであり，罪人は，罪なき悲しみに沈む罪のように見えるのだ —— "The horn seemed the work of a curse for some mysterious sin, conceived and committed before the spirit had entered the flesh.

Yet, that sin seemed something imposed, and not voluntarily sought; some sin growing out of the heartless necessities of the predestination of things; some sin under which the sinner sank in sinless woe." (White-Jacket p. 249)

Melville の horned woman についての思考は，全能の博愛（omnipotent benevolence）と同様に，経験の事実の中に歴然としている究極的無情（ultimate heartlessness）の暗示と思われる。

Bland の性格を，Serenia の愛と同じ様に，世の事に内在する性質から自然に生じる悪を行う能力として呈示している。Bland は裏切りを働く密告者だが，悪を避け，善を求める神から与えられた本能に反抗しているのではない。「Bland をじっくり観察して私は確信した。体質的な救い難い悪人だ。牛が草を喰うように，悪い行為が，呪われた全体質の合法的機能のように見えるから，悪い行為をするだけのことなのだ。—— a studied observation of Bland convinced me thet he was an organic and irreclaimable scoundrel, who did wicked deeds as the cattle browse the herbage, because wicked deeds seemed the legitimate operation of his whole infernal organization.—— (White-Jacket p. 188)

Channing が，博愛 (benevolence) は人間の道徳的本性の本質的属性として発見される，そしてそれは，神の性格に根差していると主張するのであれば，Melville はこれに対して，Calvinistic sense の Innate Depravity と Original Sin によって，神と人間の悪意（malignity）の相互の一致（a mutual correspondence of divine and human malignity）を垣間見ているのである。

これらの示唆(suggestions)〈Jackson, horned woman, Bland の呈示〉によって，Melville が避けようとしていた像 (vision) が大きく浮かび上っていた。その本質は，狂気にあって知ることのできる憎悪によって支配されている宇宙の像（vision）であった。(The vision of a universe governed by hate whose essence is known in madness)』[56]

『そして，Melville のこの様な神の本質についての疑いは，White-Jacket を書いた段階ではこれ以上は発展しない。むしろこの悪夢のような告知を押さえ込むに十分な，頑強な肯定的な宗教的希望（positive religious hope）を作り上げようとした。

Melville にとっての根本的問題は，受けるに値しない難儀 (undeserved suffering) の問題であったが，この問題を何とか結着させることができると信じていた。Serenia の宗教が，ただ滅びるために罪を犯し苦しむ者が常に存在することを説いたのに対して，Redburn や White-Jacket では，Calvinistic idea に基いての undeserved suffering を呈示したのと対照的にアメリカ国民は，'神の普遍的父としての存在'を歴史的事実にするであろうという救世主的運命を持っているという信念を表現している。』[57]

『Redburn では，God が父であることが，アメリカの楽園を顕在化する方法について具体的に示さなかったが，White-Jacket では一歩進めてアメリカ海軍のむち打ち刑 (flogging) を禁止せよという社会的大義を持ち出したのである。そしてアメリカがその使命を果すならば，普遍的な罪の赦し（universal redemption）がやってくるであろうと主張する。「‥‥この西半球では，全ての種族，すべての人民が適合した全体を形成しつつあり，アダムの疎外された子等が，やがてエデンの園の古き炉辺へ戻り来る未来がくる」.... "On this

Western Hemisphere .... there is a future which shall see the estranged children of Adam restored as to the old hearth-stone in Eden" (Redburn p. 169)

Melvilleは,「むち打ちは，アメリカの原理に基くならば，人間の本質的尊厳に反するものであり，民主主義の精神に全く矛盾している」と主張する。Melvilleにとって，むち打ち刑の廃止は，Americaの救世主的使命の一つであった。そして更に熱弁をふるってアメリカ人の使命を主張する。「我々アメリカ人は，等しく選ばれた民である。現代のイスラエル人なのだ。我々は世界の自由の方舟を荷っている。わが人種から偉大なる事を，神は予め運命づけられ，人類は期待している。そして偉大なる事を我々の魂に感じる。我々は永い間我々自身に対して懐疑的であったし，政治の救世主が来たかどうかを疑っていた。がしかし救世主(Messiah)は我々の内に現われたのだ。もし我々が救世主の促しに言葉を与えさえすれば。」——"We Americans are the peculiar, chosen people .... the Israel of our time; we bear the ark of the liberties of the world .... God has predestinated, mankind expects, great things from our race; and great things we feel in our souls .... Long enough have we been sceptics with regard to ourselves, and doubted whether, indeed, the political Messiah had come. But he has come in us, if we would but give utterance to his promptings" (White-Jacket p. 151)

Melvilleは，政治的改革によっては救い得ない悪については考えてきたが，キリスト教の民主主義的精神が，彼の中に促すもの (promptings) を感じたのである。Melvilleがそれを声に出したのは,狂気へ導くように思える他の促しを押えるためであった。'Hawthorne and His Mosses'の中で，literary Shiloh in Americaについて述べたのは，Melvilleが，救世主としてAmericaが芸術的先駆者 (artistic harbinger) を持つことを期待し，自分自身がその役割りを引き受けようと思っていたことを示している。がしかし同時に明らかなことは，アメリカの予言者が行うべき真理の探求は，厳しい未解決の問題に直面しなければならないことであった。

1．'角の生えた女性'に呪いを与えた'無情の予定運命' (heartless predestination) は，民主主義的精神に勝利を与えた恵み深い予定運命といかに調和し得るか？
2．或る人間がCalvinismの堕落 (depravity) を明白に示している時に，人間の尊厳を神の原理 (divine principle) として確認し得るのか？
3．予言者的精神は，'自らに対する法' (law unto itself) として働き，自立的に宇宙の秘密の中へ進んで行くことができるだろうか,もしそれが解明しなければならない秘密が,狂気にほとんど等しいとしても？』[58)]

Herbertは,MelvilleがMardiからRedburn, White-Jacketと発表して行く作品の中で,Melvilleの宗教的葛藤の推移を述べている。

MardiにおけるSereniaの宗教，遍在的愛と理性の合一によって，人間の道徳的本質が神の本質によって確認されるという希望と光に満ちている信仰と，Oro（神）に潜む，'神

の閉ざす秘密'への暗い疑惑の対照的な呈示, Calvinism の堕落(depravity)と, 原罪(Original Sin)をめぐっての疑問, '受けるに値しない難儀(undeserved suffering)の無情さ(heartlessness) と, これに対する測り知れない (inscrutable) 神の行い, アメリカ文学の予言者, 救世主としての役割りを伝統的宗教観とは独立して果し, "正気の狂気の根本的真理"にどのように到達するのか。Moby-Dick を書こうとしている時に, Melville が抱えていたこれらの問題を, 果してどのように解決するのか。Ishmael と Ahab という人間を創出し, その口を通して Melville は長年にわたって醸成されてきた宗教的葛藤をどのように表現するであろうか。Herbert の挙げた三つの疑問が, Moby-Dick の中でどう答えられているのか。次回は Herbert の Moby-Dick 論をいくつかの評論などを参照しながら, 記述したい。

引用文献

1) Moby-Dick and Calvinism : Thomas Herbert J. (1967New Jersey) p. 53
2) Melville Log vol. 1, p. 53
3) Moby-Dick and Calvinism pp. 58—62
4) 5) 6) 7) 8) 9) ibid.
10) Melville Log vol. 1, p. 53
11) 12) ibid.
13) Moby-Dick and Calvinism p. 63
14) 15) 16) 17) ibid. pp. 63—65
18) Melville Log vol. 1, p. 75
19) 20) ibid.
21) Moby-Dick and Calvinism p. 67
22) The Letters of Herman Melvill, ed. Merrelle R. Davis and William H. Gilman (New Haven, 1960) p. 32
23) Moby-Dick and Calvinism pp. 67—68
24) Herman Melville by Leon Howard pp. 18—40
25) ibid.
26) ibid.
27) Herman Melville by Edwin Miller p. 113
28) The Letters of Herman Melville p. 109
29) Moby-Dick and Clavinism p. 70 Footnotes
30) ibid. p. 70

31) ibid. p. 70
32) Hawthorne and His Mosses in Herman Melville, Moby-Dick, ed. Harrison Hayford and Hershel Parker pp. 541—546
33) ibid.
34)
35)
36) Mody-Dick and Calvinism pp.
37) ibid.
38)
39)
40)
41)
42) Mody-Dick and Calvinism pp. 72—75
43) ibid.
44)
45)
46)
47)
48)
49) William Ellery Channing, Works, 6 vol. IV38
50) ibid. IV41
51) Moby-Dick and Calvinism pp. 76—80
52) ibid.
53)
54)
55)
56)
57)
58) Moby-Dick and Calvinism pp. 81—82

小論中に引用されている作品

Mardi and a Voyage Thither ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston Ill., 1970)

Redburn, His first voyage ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston Ill., 1969)

White -Jacket or The World in a Man-of-War ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanstom Ill., 1970)

On Religious Influences on Herman Melville (2)

Masao OKAMOTO
Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science
1-1, Ridai-Cho Okayama Japan
(Received September 30, 1988)

In this study, as the second publication of the same thesis, the writer's purpose is try to gain a comprehensive understanding of the religious influences articulated in Herman Melville's works with focus on Moby-Dick.

In this publication, the writer traces the religious and psychic struggles after the death of Melville's father Allan, to the time Melville was preparing for Moby-Dick, based on 'Moby-Dick and Calvinism' by Thomas Herbert Jr. with reference to Melville Log, 'Herman Melville' by Leon Howard, and other critical and biographical studies.